

滋賀県長浜市方言



滋賀県方言区画図

【滋賀県の方言区画】滋賀県の方言は、地域差の大きい方言であるとされ、旧木之本町・旧長浜市を中心とする「湖北方言」、彦根市・近江八幡市・東近江市を中心とする「湖東方言」、今津町を中心とする「湖西方言」、大津市を中心とする「湖南方言」、湖南市・甲賀市を含む「甲賀方言」の5つに大別される。これら5つの区画のうち、湖南方言はもっとも京都方言的な特徴を持ち、滋賀県方言内では湖北方言が最も特異とされる。湖東方言と湖西方言は、区画として特立し得る特徴を持つが、京都式アクセントである点においては湖南方言と、語法の面においては湖南方言、湖北方言それぞれと重なるものみられ、特徴の多い湖南方言と湖北方言の緩衝地帯となっている。甲賀方言は、大きくは湖南方言域とされるが、尊敬語形式やアスペクト表現など語法面において三重県伊賀方言や湖東方言と重なるところがあり、湖南方言とは区別される。

【長浜市方言について】湖北方言域にあたる長浜市方言は、その大きな特徴として、アクセント・音声面の特徴が挙げられる。すなわち、滋賀県内の他の方言域では京都式アクセントなのに対して、垂井式アクセントが用いられ、北陸方言・中部方言との共通点が見られる。また、連母音の/ai/・/oi/の/i/が少し奥寄りで発音され[aë][oë]のように発音される。

文法体系全般は、近畿中央部の体系とほとんど同じである。滋賀県方言内では、湖東方言・湖西方言と重なるところが多く、助詞のトサイガ・ホン・ナーシなどの使用がその特徴として挙げられる。また、長浜市方言の「(ヤ)ハル」「(ヤ)アル」「(ヤ)ンス」「ヨル」など複数の敬語接辞が活発に用いられることも特徴である。

【調査概要】本稿の記述は、長浜市に生育した高年層話者への聞き取り調査をもとに行っている。用例は、長浜市方言話者同士による自然談話資料、昔話資料から引用したものも含む(用例出典参照)。引用元の記載のないものは、聞き取り調査の際に確認した例文および、自然談話資料に現れたものである。

滋賀県長浜市方言の活用表

《動詞》

活用形 \ 類別		a類 書く	b類 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル
	断定過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ	ミロ	コイ	シロ
		カキ(ー)	ミ(ー)	キ(ー)	セ(ー)
	禁止	カクナ	ミルナ ミナ	クルナ	スルナ スナ
	意志	カコ(ー)	ミヨ(ー)	コヨ(ー)	シヨ(ー) ショ(ー)
推量	カクヤロ(ー)	ミルヤロ(ー)	クルヤロ(ー)	スルヤロ(ー)	
接 続 類	連体非過去	カク	ミル	クル	スル
	連体過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カイテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カイタラ	ミタラ	キタラ	シタラ
派 生 類	否定	カカヘン	ミヤヘン	キヤヘン	シヤヘン
		カカン	ミーヘン	コーヘン	セーヘン
			ミン	コン	セン
	丁寧	カキマス	ミマス	キマス	シマス
	使役	カカス	ミサス	コサス	サス
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能	カケル	ミラレル	コラレル	ヨー スル
		ヨー カク	ヨー ミル	ヨー クル	《デキル》 《デケル》
	尊敬	カカハル	ミハル	キハル	シハル
		カカアル	ミヤハル	キヤハル	シヤハル
		カカンス	ミアル	キアル	シアル
			ミヤアル	キヤアル	シヤアル
		ミヤンス	コンス キヤンス	サンス シヤンス	
軽卑	カキヨル	ミヨル	キヨル	シヨル	
継続	カイトル	ミテル	キテル	シテル	
	カイトル	ミトル	キトル	シトル	
	カイタール	ミタール	キタール	シタール	
希望	カキタイ	ミタイ	キタイ	シタイ	
のだ	カクノヤ カクネン	ミルノヤ ミルネン	クルノヤ クルネン	スルノヤ スルネン	

a 類動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak・u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik・uはkをQ(促音)にし「イツ-タ」。
g	嗅ぐ kag・u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das・u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac・u	タツ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir・u	キッ-タ	tをQ(促音)にする。
w/	買う ka(w)・u	コー-タ	wをR(長音)にする。wの前の母音がaの場合はoに変える。基幹が1拍の場合は長音化する。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

	赤い	静か(だ)	学生[ガクセー](だ)
終止類	断定非過去	アカイ	シズカヤ
	断定過去	アカカッタ	シズカヤッタ
	推量	アカイヤロ(ー)	シズカヤロ(ー)
接続類	連体非過去	アカイ	シズカナ
	連体過去	アカカッタ	シズカヤッタ
	中止	アコ(ー)テ	シズカデ
	仮定	アカカッタラ	シズカヤッタラ シズカナラ
派生類	否定	アコ(ー)ナイ アカナイ アカイコトナイ アカイコトアラヘン	シズカヤナイ シズカヤアラヘン
	なる	アコ(ー)ナル アカナル	シズカニナル
	副詞	アコ(ー) アコーニ	シズカニ
	丁寧	アカイデス	シズカデス
	のだ	アカイノヤ アカインヤ アカイネン	シズカナンヤ シズカヤネン

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

a 類動詞(五段動詞)は 型、b 類動詞(一段動詞)は 型と 型 r、「来る」は 型 k と 型 r、「する」は 型 s と 型 r の活用形をもつ。

b 類動詞「見る」の 型と 型 r の形式の現れ方は共通語とほぼ同じである。可能形では「ミラレル」および「ヨー ミル」が現れ、「ミレル」は現れない点で共通語ほどは r 化が進んでいない。

「来る」は、断定非過去・連体非過去形で 型 r が現れ、その他の活用では 型 k が現れる。 型 k のうち、命令形・否定形・尊敬形にイ段基幹が現れる点で共通語と異なる。なお、否定形と尊敬形の「ンス・ヤンス」が後接するときのみ、オ段基幹(コーヘン・コン・コンス)とイ段基幹(キヤヘン・キヤンス)というように異なる基幹が現れる。

「する」は、「来る」と同様に、断定非過去・連体非過去で 型 r が現れる。その他の活用では、 型

s が現れるが、工段基幹が命令形(セー)および、否定形(セーヘン・セン)で現れる点、尊敬形で工段基幹が現れる点で共通語と異なる。なお、尊敬形の「ンス・ヤンス」が後接するときのみ、ア段基幹(サンス)とイ段基幹(シヤンス)というように異なる基幹が現れる。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形、連体非過去形は同形で、「書く」「見る」「来る」「する」は「カク」「ミル」「クル」「スル」という形になる。

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形、連体過去形は同形で、a 類動詞では基幹音便形に、b 類動詞では 型基幹(=語幹)「来る」「する」では 型イ段形に「タ」を後接した形となる。

〈命令形〉

命令形には、共通語と同じ形式「カケ」「ミロ」「コイ」「シロ」に加えて、a・b 類動詞および「来る」には「カキ(ー)」「ミー」「キー」のようにイ段基幹あるいはイ段基幹を長音化した形、「する」には「セ(ー)」のように工段基幹あるいは工段基幹を長音化した形による命令形がそれぞれある。ただし、これらの命令形が言いきりの形で現れることは少なく、終助詞「ヤ」などを伴うことが多い。

・はよ読みや。(早く読めよ。)

・はよ寝や。(早く寝ろよ。)

禁止形

禁止形は、断定非過去形に「ナ」を後接させる。末尾拍がルの動詞では、「ル」が撥音便化を起こし、「ミンナ」「クンナ」「スンナ」のようになることもある。また、b 類動詞の 型基幹(連用形)と「する」の 型sの基幹に「ナ」を後接させて作る形もある。

・そんな 拘束するな ちゅーに 縛り付けんな ゆーんやけどな。(そんなに拘束するなというのに 縛り付けるな 言うのだけどね。)

〈意志形〉

意志形は、「カコ(ー)」「ミヨ(ー)」「コヨ(ー)」「シヨ(ー)」という形で用いられる。「シヨ(ー)」

は融合して「シヨ(ー)」となることがある。

・それを聞こーと思っとったんや。(それを聞こうと思っていたのだ。)

・次からはちゃんとしよー。(次からはちゃんとしよう。)

〈推量形〉

推量形は、断定形に「ヤロ(ー)」を後接する。

・結局ほんで、息子がもんでくるやろーというつもりやろ。(結局それで、息子が戻って来るだろうと言うつもりだろう。)

〈中止形〉

中止形は基幹音便形など過去形と同じ形に「テ」を後接した形となる。

〈仮定形〉

仮定形は「タラ」が使用される。

・もしほんまの仏さんをどついたら、たいへんなことになるわな。(もし本当の仏様を殴れば、大変なことになるよね。)(滋賀・「伊吹弥三郎」)

〈否定形〉

否定辞は a 類動詞は 型ア段に、b 類動詞は 型基幹に、「来る」は 型k「コ」に、「する」は 型s「セ」に「ン」または「ヘン・ヤヘン」がつく。ただし、「来る」では、「キヤヘン」(イ段基幹)「コーヘン」「コン」(オ段基幹)のように否定辞によって異なる基幹が現れる。また、「する」も同様に異なる基幹が現れ、「シヤヘン」(イ段基幹)「セーヘン」「セン」(工段基幹)となる。

・「そんなものは、知らん。」(そんなものは、知らない。)(滋賀・「天女と太夫」)

・夜もふけて、乗りものなかのむすめの泣き声と、松の木のえだをならず風の音だけしか聞こえへん。(夜も更けて、乗り物の中の娘の鳴き声と松の木の枝を鳴らす風の音だけしか聞こえない。)(滋賀・「メタテカイ」)

なお、否定接辞の「ヘン」が後接するとき、基幹の長さが1拍の場合には長音化する。

・泡はでーへんけどな。(泡は出ないけれどね。)

否定形自体の活用は、カカン・カカヘン(非過去形) カカナンダ・カカヘナンダ(過去) カカンヤロ・カカヘンヤロ(推量形) カカンカッテ・カカヘンカッテ(中止形) カカナンダラ・カカヘナン

ダラ(仮定形)、カカクナル・カカヘンナル(なる形)となる。なお、否定辞の「ヒン」も最近使われるようになってきている。

〈丁寧形〉

動詞の丁寧形は、a類動詞は 型イ段形に、b類動詞は 型基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「シ」に「マス」が後接する。伝統的に使用するとされている「ドス」は使用されない。

〈使役形〉

使役形は、a類動詞は 型ア段形に、b類動詞は 型基幹に、「来る」は「コ」に、「する」は「サ」に「ス」がついて、「カカス」「ミサス」「コサス」「サス」となる。使役形自体は、a類動詞と同様の活用型をとる。

・主役を引き立てさす。(主役を引き立たせる。)

〈受身形〉

受身形は、動詞の基幹ア段(b類動詞・「来る」では 型「」のア段「ミラ」「コラ」など、「する」では「サ」)に「レル」を後接させて作る。受身形自体は、b類動詞と同様の活用型をとる。

〈可能形〉

a類動詞は 型エ段形に「ル」が後接し、b類動詞と「来る」は 型ア段形に「レル」が後接して、「カケル」「ミラレル」「コラレル」となる。また、「ヨーカク/カカン」のように「ヨー+断定形/否定形」の形も使用される。なお、「する」はこれらの形はなく、語彙的に「デキル/デキヘン」「ケル/ケヘン」を用いる。能力可能と状況可能の形式の区別がある。

		能力可能	状況可能
書く	肯定	カケル ヨーカク	カケル
	否定	カケヘン ヨーカカン	カケヘン
見る	肯定	ミラレル ヨーミル	ミラレル
	否定	ミラレヘン ヨーミン	ミラレヘン ミラレン

「ヨー{肯定/否定}」は能力可能でしか用いられない。「ヨー{肯定/否定}」のうち、肯定形では「カ

ケル」(可能動詞)「ミラレル」(ラレル)の方がよく使われる。

・うちの孫はまだ小さくて字を知らないので、本をよー読めん。(うちの孫はまだ小さくて字を知らないで、本を読むことができない。)

・「今どきから送れるかいな。それになあ、ここは静かやけど、沖はようあれとるで、なんぼたのまれても、今晚はかなんわ。」(こんな時間から送れるわけないだろ。それにね、ここは静かだけど、沖はよく荒れているから、どれだけ頼まれても今晚は無理だ。)(滋賀・「ぼうれいホテル火」)

〈尊敬形〉

「(ヤ)ハル」「(ヤ)アル」「(ヤ)ンス」といった複数の尊敬接辞が活発に用いられる。a類動詞では、ア段基幹に「ハル」「アル」「ンス」が後接する。b類動詞では、型基幹(=語幹)に「(ヤ)ハル」「(ヤ)アル」「ヤンス」が後接する。「来る」では、イ段基幹「キ」に「(ヤ)ハル」「(ヤ)アル」「ヤンス」が、オ段基幹「コ」に「ンス」が後接する形をとる。基幹の「コ」が「ゴ」となり「ゴンス」となる場合もある。「する」では、イ段基幹「シ」に「(ヤ)ハル」「ヤアル」「ヤンス」が、ア段基幹「サ」に「アル」「ンス」が後接する。

以上の形式のうち、「(ヤ)ンス」の実現形にのみ特徴的な形が用いられることがある。具体的には、中止形・断定過去形・仮定形のとくに、「行かアンテ・見ヤアンテ」、「行かアンタラ・見ヤアンタラ」、「行かアンタ・見ヤアンタ」という形で実現される。

尊敬形は原則以上のものであるが、「ハル」「アル」はa類動詞以外にもつくようになってきている。

・ほんでこまらはってな、さわったり、つめったりしやはったけど、どっちもおんなじで見分けがつかんのやて。(それで困られてね、触ったり抓ったりされたけれど、どちらも同じで見分けがつかないのだった。)(滋賀・「伊吹弥三郎」)

・このふたりの神さんが、山の高さくらべをさあつたんや。(この二人の神様が、山の高さ比べをされたのだ。)(滋賀・「竹生島の話」)

・あそこにわしの同級生の子も いやんすんや。

(あそこにわたしの同級生の子もいるのだ。)

- ・今度、確か去年も来ゃんたでー、え、去年は来ゃんせんかったんか。(今度、確か去年も来たよ、え、去年は来なかったのか。)

なお、挨拶ことばや特定の行為要求の発話などにごく一部残るのみであるが、「オ～ヤス」が使用されることもある。

- ・どうか上がっておくれやす。(どうぞ、召し上がってください。)

〈軽卑形〉

軽卑形は「ヨル」が用いられ、a 類動詞はイ段基幹に、b 類動詞は 型基幹に、「来る」「する」はイ段「キ」「シ」にそれぞれ後接する。

- ・先まわりしたろ、と思うて、どんどん川を下っていきよった。(先回りをしてやろうと思って、どんどん川を下って行った。)(滋賀・「おんば石」)

〈継続形〉

継続形は「ている」に由来する「テル」,「ておる」に由来する「トル」,「てある」に由来する「タール」の3つを用いる。これらはa類動詞の基幹音便形等、過去形に準じる形に接続する。

「テル」「トル」「タール」は、「タール」が非生物主語に使われるということ以外に制限はなく、「テル」「トル」は何にでも用いられる。

- ・カッパは、片手にむすこをだいてるし、片手でしかふせげへん。(河童は、片手に息子を抱いているし、片手でしか防げない。)(滋賀・「おんば石」)
- ・むすめが、あつけにとられてるまに、もう、おばあはんは、したなめずりをしとる。(娘が、あつけにとられている間に、もう、おばあさんは、舌なめずりをしている。)(滋賀・「お鯉が淵」)
- ・ただまるこい石が、ころんとおいたるだけやけんど、こんな話があるんやで。(ただ丸い石がコロんと置いているだけだけれど、こんな話があるのだよ。)(滋賀・「メタテカイ」)

〈希望形〉

希望形は「タイ」を用いて、a 類動詞のイ段基幹等、軽卑形と同じ形に接続する。

〈のだ形〉

「のだ」に相当する形式として連体形につく「ノヤ」「ンニヤ」「ニヤ」と断定形につく「ネン」が用いられる。「ノヤ」は、「ンヤ」になることが多く、「ノヤ」はほとんど使われない。また、「ンニヤ」「ニヤ」となることはまれで、その中でも「ニヤ」となることはほとんどない。

- ・「わしのほうが高いんやぞ。」ちゅうてな、とうとうけんかになってしもたんや。(「私の方が高いのだぞ」と言ってね、とうとう喧嘩になってしまったのだ。)(滋賀・「竹生島の話」)

- ・わたしも一知らんねん。(私も知らないのだ。)

- ・「待っとおくれ、今、取ってやるで。」いいながら、わりばさみで二つ三つ取り、なべすみのついたきたない手で持って、わたしたんにゃなあ。(「待ってくれ、今、取ってあげるから」と言いながら割挟みで二つ三つ取り、鍋炭のついた汚い手で持って、渡したのだ。)(滋賀・「弘法さんの話(一)」)

- ・あの一、わたし中見てへんにゃけど、あのかういう風に、ほれ、綿帽子みたい被さある。(あの一、私は中を見ていないのだけれど、そのかういう風に、ほら、綿帽子みたいに被される。)

- ・「ちょうちんも持ってへんのにつまらんやけ。そんなにくるなる時刻やないのになあ。なんでこんなに、にわかにくるなんにやる。」(提灯も持っていないのにつまらないじゃないか。そんなに暗くなる時間じゃないのにねえ。なんでこんなにすぐに暗くなるのだろう。)(滋賀・「おはなギツネ」)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞の交替語幹は、語幹末母音がaの場合に、交替語幹として末尾がoに替わる「アコ(一)赤)」などが現れる。また、語幹末母音がiのときには、iがyuに替わる「クルシュ(一)苦)」などが、語幹末母音がeのときにはoに替わる「ヨ(良)」が交替語幹となる。中止形・否定形・なる形・副詞形でこれらの交替語幹やその長音形が現れる。語幹末母音がu・oの場合は語幹が交替することはなく、中止形

などでも語幹やその長音形が用いられる。

〈断定非過去形・連体非過去形〉

共通語の形容詞と同様に、イ語尾で終わる。断定非過去形と連体非過去形は同形である。

- ・「しもた。」と思わはったが、もうおそい。(「しまった。」と思われたけれど、もう遅い。)(滋賀・「ぼうれいホテル火」)
- ・あーほんならいい。(あーそれならいい。)
- ・ほんでもね、値段は案外あの一ほら高いもんはいいもんなんやけど、結構お店によってはね、高くしはるのもあるんやで。(それでもね、値段は案外あの一ほら高いものはいいもののなだけけれど、結構お店によってはね、高くされるものもあるのだよ。)

〈断定過去形・連体過去形〉

形容詞の断定過去形・連体過去形は、語幹に「カッタ」を後接した形が用いられる。

- ・この着物は、高かった。
- ・高かった着物を、安く買った。

〈推量形〉

推量形は断定形に「ヤロ」を後接した形になる。

- ・苦いやろ。今の煮干は、全然どうもないで。(苦いだろう。今の煮干しは全然大丈夫だよ。)

〈中止形〉

中止形は、交替語幹(またはその長音形)に「テ」を後接した形になる。

- ・ひとりになった太夫は、さみしゅうてさみしゅうて、朝は、うらの山に登って気をはらし、昼からは、船で湖へ出て、まぎらわしていたそうや。(一人になっただゆうは、寂しくて寂しくて、朝は、裏の山に登って気を晴らし、昼からは、船で湖へ出て気を紛らわしていたそうだ。)(滋賀・「天女と太夫」)

〈仮定形〉

仮定形は、動詞型音便基幹「カッ」に「タラ」が後接した形になる。

- ・ニゴロではないやろ。ほなもん、こんだけいかかったら、分からん、分からんけど。(煮頃鮎ではないだろう。そんなもの、これだけ大きかったら、分からない、分からないけれど)

〈否定形〉

否定形は、「アカナイ・アコ(ー)ナイ」のように語幹と交替語幹(またはその長音形)の両方が現れる。また、「アカイコトナイ」「アカイコトアラヘン」のように連体形に「コトナイ」「コトアラヘン」がつく形も用いられる。

・

〈なる形〉

なる形は、否定形と同様に「アカナル・アコ(ー)ナル」のように語幹と交替語幹(またはその長音形)の両方を用いる。

〈副詞形〉

副詞形は、交替語幹やその長音形が単独で使われるか、交替語幹の長音形に「ニ」をつけた形で用いられる。

- ・まゝそんな時分には 寺のな、あの普及員やってやんす子に ちこーしてたもんやで。(まゝその頃は 寺の普及委員をしている人と親しくしていたので。)

〈丁寧形〉

丁寧形は、断定形に「です」が後接した形となる。

〈のだ形〉

連体形に「ノヤ」がつく形と、断定形「ネン」を後接した形が用いられる。「ノヤ」は、「ンヤ」になることが多く、「ノヤ」はほとんど使われない。

- ・わしのほうが高いんや。(私の方が高いのだ。)(滋賀・「竹生島の話一」)
- ・ちょっと 具合 悪いねん。(ちょっと 具合が悪いのだ。)

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

形容名詞述語、名詞述語とも断定非過去形は形容名詞・名詞に「ヤ」が後接する。

- ・しこぶちさんも、もうだいじょうぶやと思うて、また、朽木の川を、どんどん下っていかはったんや。(しこぶちさんも、もう大丈夫だと思って、また、朽木の川をどんどん下って行かれたのだ。)(滋賀・「おんば石」)
- ・ひと晩でつくらんならんのやから、ほらあッ仕事や。(一晩で作らないといけなのだから、それは大仕事だ。)(滋賀・「田村山」)

形容名詞述語の連体非過去形は「ナ」の形が使用される。

- ・ようやく波の静かな小津袋（小津の入り江）へ着かしたのは、もう、夜もだいぶんふけていたのや。（ようやく波の静かな小津袋に着かれたときは、もう、夜もだいぶん更けていたんだ。）（滋賀・「ぼうれいホタル火」）

名詞の連体格では助詞「ノ」が用いられる。

- ・その学生の本（その学生の本）

〈断定過去形・連体過去形〉

形容名詞述語・名詞述語ともに断定過去・連体過去形は動詞型音便基幹「ヤッ」に「タ」を後接した形を用いる。

- ・それが 大きくて 立派やったん。

〈推量形〉

推量形は、「ヤロ（-）」を後接した形になる。

- ・田作りは、んーまゝあれは、縁起を担いでの 名前やる。

〈中止形〉

中止形は「デ」を後接した形になる。

〈仮定形〉

仮定形は、「ナラ」が後接した形または動詞型音便基幹「ヤッ」に「タラ」が後接した形になる。

〈否定形〉

否定形は、「ヤナイ」「ヤアラヘン」を後接した形になる。

- ・あの人は、先生やない。（あの人は、先生ではない。）

〈なる形〉

なる形は、「ニナル」を後接した形になる。

- ・ほれからはな、ピワのなるじぶんには、いつも、川に水がいっぱいになるくらい、雨が降るようになったんやと。（それからはね、枇杷のなる季節はいつも川の水がいっぱいになるくらい、雨が降るようになったんだっ

て。）

- ・ある町の旦那は、散歩をするのがすきちゅうことで、朝や夕方になると、ちよくちよく町をひとまわりしてきやはったそうや。（ある町の旦那は、散歩をするのが好きということで、朝や夕方になると、ちよくちよく町を一回りしてこられたそうだ。）（滋賀・「けんぼの話三こおりざとう」）

〈丁寧形〉

形容名詞述語・名詞述語の丁寧形は、「デス」を後接した形になる。

- ・えー でも 幸せですね。
- ・「ああ、これは、わたしの羽衣です。願いがかかって天に帰ることができます。」（滋賀・「天女と太夫」）

〈のだ形〉

のだ形は連体形（尾略基幹）「ナ」に「ンヤ」を後接した形になる。また、断定形「ヤ」に後接する「ネン」も使用される。

- ・そうしたら、橋の上にいたのは、いがい 大蛇なんや。（そうしたら、橋の上に居たのは、大きな大蛇なのだ。）（滋賀・「大力おりか」）
- ・それがやね 一番 大将やねん。（それね、一番大将なのだ。）

用例出典

滋賀：滋賀県小学校教育研究会国語部会編（2004）『読みがたり 滋賀のむかし話』日本標準

参考文献

寛大城（1962）「滋賀県方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂

（1982）「滋賀県の方言」『講座方言学 7 近畿地方の方言』国書刊行会

（酒井雅史）